

# グランドサハラ エクスペディション-14

## Ⅲ <サハラ縦断帰還>イスラム圏の洗礼 モーリタニア

### 【国土の80%がサハラ！砂の国モーリタニアへ】

2月2日 セネガル川がきれいな朝焼けを映していた。相変わらずどこからともなく出没するヤギが風景に動きを添えてくれる。今日は、いよいよモーリタニアへの国境を越える。サハラの砂がセネガル川以北にたっぴりと待ち受けているだろう。

約100キロで国境の町に到着した。ボーダーラインはセネガル川である。西アフリカ数カ国で共通のCAF通貨もここで終わり、バラ銭は水と乾燥を凌ぐ飴で使い切った。川の向こうはモーリタニアのウギア通貨に変わる。

ゲートが開き、ハイエースに続いてフェリーにバイクを入れ込む。対岸は手の届く距離。川面を吹き抜ける風は心地いいが、今日は太陽の照りつけが痛い。

モーリタニアのロッソ(Rosso)上陸。ロッソは西アフリカでも最も国境越えが厳しいポイントで知られている。厳しいというのは、つまり異国者にてである。セネガルは比較的自由的な風潮の国だった。内陸に比べれば豊富な物資と文化的発展もあり、イスラムの教徒ですら軽装で、特に、都市の女性には開放感かみなぎっていた。

モーリタニアはどんな意志を持つ国で、どんな砂の世界が待っているのだろうか・・・

白や藍のイスラム服に身を包んだ男たちが視野にグッと入ってくる。たいていは片手にコーランの教本を持ち、難しいそうな表情・・・国境入国でかなり手間がかかり、取り囲む役人も表情が硬い。視界に女性がいない・・・セネガルとはまったく違う雰囲気は我々を緊張させたが、なんとか無事ポイントを通過することができた。



ゲートを出ると、すぐ砂の世界を思わせた。広大なモーリタニアの海岸線はアムールのようにサハラが侵入しており、国土の80%が砂の海に没しているのだ。…この先に何かがあるのか…アルジェリアホガールでは死の匂いも嗅ぎながら北から南へ移動した。モーリタニアはサハラの最西ルートを北上してゆく。約70キロ間は濃褐色の砂丘が続いた。その後、灰色の砂へ風景が変わった途端、砂嵐が襲ってきた。今度こそ風の中に何かがいるような気がしてならない。

こんな気持ちをよそに、私の行く手を阻むラクダは、悠々と道路を横断していくのだ。記憶にあるサハラの風景が呼び戻されてきた…路肩の焼け焦げた車の残骸と、ゲルの天幕が点在する濛々の荒野を、見えなくなったピックアップを追いかけてアクセルを開いた。又アクシヨットまでの道のりは舞い上がる砂塵に煙った灰色の空と、狂風だけがまとわりついて離れなかった。今日までは道があるが…その向こうは道は無いかもしれない。



2月3日 朝、強風の中、又アクシヨット沖の漁港を見にゆく。ここは日本の出資でできているステーションらしい。このあたりは赤道からの暖かい海流とイベリア半島からの寒流がぶつかり合い、良い漁場で、砂漠の国でありながら、海の資源にも恵まれている。沖に出ている船は木造の簡素な造りで、戻ってきた船を数人で引きずり上げ、魚はロバが引く荷馬車でステーションに運ばれてゆく。なんともゆっくりとした時間の中で人々は生きていた。



街に戻り、モスク近くのマルシェを覗いてみると、活気のない青空市場に出会う。海岸線の街なので海産物や海路によって入ってくる物資(雑貨)など、豊富にあるが、とにかく衛生状態が悪いのである。生の魚は石の上でさばかれえるが、洗う水は無いに等しい。また露店の一筋横はゴミと尿尿の道が出来上がっているため雑踏から弾き飛ばされると、この道を歩かなくてはならない。



モーリタニアには4つの古代遺跡(ウアダ、シンゲッティ、ティシット、ウアラタの古いクスール)、と大西洋に面した広大な砂州の自然遺産(バン・ダルガン)が存在する。古代遺跡はいずれもサハラ奥深い内陸のため今回のルートに入っていなかったが、マリと同様、砂漠の商隊の交易地である。またモーリタニアは西アフリカの中でも厳格なイスラム国であり、ダカールのような寛容な雰囲気は感じられない。この日これを象徴するような事件が起こってしまった

この下町から程遠くないモスク傍では、携帯電話屋に群がる教徒の姿があった。街頭には一人として女性の姿は見えない。イスラム圏特有の雰囲気である。実はこの日、ガイドの親切な計らいで街一番のモスクを見学した。その際、「大丈夫だよ。ここまでなら。」と入口の門から2メートルほど中に入ってモスクの塔をバックに一枚写真を撮った光景を周りのムスリンを見つけ、「奴は異教徒だ！モスクを汚した」と騒ぎだしたのだ。そしてすぐに警察に通報されてしまったのだ。「大変だ！」「早く乗って！乗って！」ガイドに言われ、すぐピックアップのバンに飛び乗る。すると男性たちが長着をひるがえし、物凄い形相で車の後を追いかけてきた。

「なんて事だろう…モスクの敷地に入ったのはほんのわずかな時間だったのに！」  
車を路地から路地へと迷走させ、この危機を乗り切った。

恐るべしモーリタニア、救済の為の行為は自分には持ち合わせていないのだ。しかもここは‘アッラー’絶対の国。彼らには我々がどのように映ったのだろう……

